

備陽史探訪

第 84 号

 発行
 備陽史探訪の会
 福山市多治米町5-19-8
 TEL. (0849) 53-6157

悲運の国衆新庄古志氏

会長 田口 義之

尼子の将として知られた古志重信の次男であつたとされている。

戦国時代、備後南部に勢力を持った国人領主に古志氏がいる。同氏は福山市本郷町の大場山城を本拠に、天正一九年（一五九二）まで、「新庄」と呼ばれた付近一帯を支配した。この新庄古志氏（以下大場山城に居城した古志氏をこう呼ぶ）については、地元の労作『松永市本郷町誌』を初め『広島県史』『福山市史』等に、金江町の古志家に伝来した『古志家文書』に基づいて、その備後入部の経緯や系譜等が述べられている。これらの文献によると、新庄古志氏は出雲国神門郡古志郷を名字の地とした「出雲古志氏」の一門であり、備後入部の経緯は、応永期（一五世紀初頭）に古志国信が備後守護山名氏の守護代として沼隈郡新庄に入部したこと、以後歴代山名氏の被官として活躍したこと、また、最後の大場山城主と伝えられる古志豊長は、

一七名連署の起請文案（毛利家文書二二五号）に「古志左衛門大夫豊綱」の名があり、小早川・毛利家文書中の「毛利元就雄高山行向滞留日記」に備後国衆の一員として「古志左衛門大夫」の名がある。

これをどう理解すればよいのか。

「古志家文書」を残した古志氏とは別に「新庄古志氏」の存在を想定すればよい。こう考えて文献史料を当たると、備後南部で活躍した古志氏として、天文期（一六世紀前半）に豊清（『横山文書』）、弘治・永禄期（一六世紀半ば）に先に掲げた豊綱、天正期（一六世紀後半）に元清（『厳島文書』）の名を見つけることが出来る。さらに、近世の文献であるが『水野記』寛永寺社記を紐解くと、沼隈郡本郷・神村・今津・東・西村（戦国期の古志氏の勢力圏である）の寺社の外護者として「古志正光以来、古志清左衛門に至る六代」「天正の末古志元綱」「天文年中、古志豊清」の名を見いだすことが出来る。「元清」「元綱」何れも毛利氏麾下の国衆の名乗りとして妥当なものである。すなわち、上記の史料を基に古志正光から豊清・豊綱・元清を経て元綱に至る新庄古志氏の系譜が復元されるわけで、筆者はこれを通説にいう古志氏（出雲古志氏）

とは別に、備後南部の国衆「新庄古志氏」の系譜として認めたいのである（注②）

なお、「新庄古志氏」の存在を認めると、「古志家文書」を伝えた古志氏（『本郷町誌』等の述べる「古志氏」である）の存在が問題となるが、これは、こう考えればよい。すなわち、同文書を伝えた古志家は吉信、重信以来の出雲古志氏の正当な後継者であったが、天正末年の毛利氏「惣国検地」の結果、出雲から備後へ移されたこと（注③）。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦以後毛利氏を浪人し、そのまま備後南部に土着したこと。これがそもそも出雲古志氏と新庄古志氏が混同される原因となったのである（注④）

注①拙稿「新庄古志氏についての一試論」（備後の山城と戦国武士）

注②同氏を出雲古志氏の一門とする考えまで否定するものではない。

注③「毛利氏八ヶ国時代分限帳」に「五百石二升四合、古志新十郎、備後恵蘇郡二百石一斗九升六合、古志因幡守、備後御調郡」とある。

注④新庄古志氏は文禄元年（一五九二）、毛利氏によって改易されたため家伝文書を残さなかった。

阪奈史跡駆け巡り印象記

出内 博都

四月八日・九日、平田さんの先導で一泊二日の阪奈地域の史跡巡りの途についた。例によって早朝三時三十分出発。少々雨を気にしながらも旅慣れた先導に二台の車は快調に走り続けた。八時頃には大阪の朝のラッシュをくぐりぬけて、近鉄南大阪線「土師ノ里」駅という、私たちには無限の郷愁をさそう地名が目に入るあたりを走っていた。

☆市野山古墳(藤井寺市国府)

―允恭天皇陵古墳・恵我長野北陵―

全長二七メートルの前方後円墳、周濠もよく見える(元は二重濠だったらしい)。陪冢数基が現存する。允恭天皇は倭の五王の済に比定され、盟神探湯という神裁裁判の伝承を持つ古代の専制君主の風貌を偲んだ。

☆道明寺天満宮(藤井寺市道明寺)

菅原道真が叔母の覚寿尼と別離の涙を流した道明尼寺の前を通って、檜皮葺の千鳥・唐破風付の入母屋造の美しい社殿の前に着く。土師氏の遠祖天穂日命と叔母覚寿尼を共に祀る。土師寺の五重塔の心礎、撰社土師神社、土師氏の歴史の一端を語る「修羅」の出土とその復元模型の展

示など、印象に残ったものである。

☆菅田八幡宮(羽曳野市菅田)

欽明朝の頃、任那の早期回復を祈り、応神陵の後円部山頂に社殿を創建、平安中期、後冷泉天皇の時、現在地に移す。源頼朝の保護によって神宮寺をつくり栄えた。南北朝から戦国の争乱によってたびたび焼失、現社殿の大半は豊臣秀頼(奉行片桐且元)の再建である。

境内が広く、渡来系の当宗忌寸の祖を祀る当宗神社、恵美須神社があり、伝朝鮮国王寄進の古風な灯籠や伝菅公礼拝石などがある。本殿の他、寛永期の南大門・絵馬堂・朱印蔵など重文級の建物が多数。

容積量ではまさしく日本一の応神陵古墳(菅田山古墳)の重圧感がかえって町中の喧噪を遮って森厳さを加える感がある。付近一帯が豊臣・徳川の道明寺古戦場というのも、一抹の感慨を覚えた。

☆叡福寺と聖徳太子墓(上城古墳)

(南河内郡太子町太子)

聖徳太子磯長墓――六二一年生母間人皇后、六二二年聖徳太子、膳手姫(妃)を葬る「三骨一廟」の陵墓。推古天皇の時、墓の南に御廟寺(石川寺・磯長寺)を建立、聖武天皇の時、東院＝東福院・西院＝叡福寺とする。南北朝期に高師泰軍の、戦国

末期に織田信長軍の兵火にあう。後、豊臣秀頼による太子殿(国重文)の再建をはじめ、多くの殿堂が建てられ太子伝説の中心として栄えている。大きな楕円形の太子墓、たくさん石造物、墓碑、松井塚古墳の横口式家型石棺など見所の多い史跡である。

☆源氏三代の墓と通法寺跡

(羽曳野市通法寺)

鎌倉・室町・江戸時代を通じて日本を支配した幕府政治、その原点となる河内源氏の故郷は、草深い一面の葡萄畑の中に静かなたたずまいを見せていた。祠堂にときめく藤原貴族の「さぶろうもの」として犬馬の労をとり、歴史の流れの中でたたかき生きた武家の本流河内源氏。その栄光とは無縁に見える通法寺の、わずかに残った山門・長屋門・鐘楼、

頼信・頼義によって創建されて九百余年、栄枯盛衰という語はまさにこの寺のためにあるのか……。南西方向へ二百メートル古びた階段をのぼって僧侶の墓地にでる。整備が充分とはいえない墓地であった。その墓地を抜けて西側に柵に囲まれ、円墳のような大きな土饅頭形の盛土の頂上に石柵に囲まれた一角が見える。墓標はどんな形かさだかなことはわからなかった。

「史跡 源義家墓」と刻まれた石柱を見たとき、いい知れぬ感慨を覚えた。八幡太郎義家――千軍万馬の中で一世を風靡した武将、花の都を去ってこの草深い山中に静かに眠る。故郷の地は忘れ難いのか、それとも無骨な武士は都の地に馴染まなかったのか――。



八幡太郎源義家の墓
毛利一族の墓が土饅頭であつた謎がとけた。五輪塔や宝篋印塔ではなかつた。これが武家本来の墓の姿である。

少し離れて河内源氏の始祖頼信の墓がある。嗚呼…この谷から日本の中世は始まったのか、観光バスも入らないこの地、何人の人がこの墓と語り合えるのか。心に深く残ったひとときであった。

☆春日向山古墳（太子町山田）

―用明天皇陵古墳・磯長原陵―
山田地区から西にのびる丘陵性台地に南面する二段造りの方墳である。東西六五メートル、南北五五メートル、幅数メートルの周濠（空濠）がある。用明天皇は当初大和に葬られたが、蘇我馬子の時に、ここ磯長の「王陵の谷」に会葬された。飛鳥に君臨した王家が七世紀初め、突如、磯長の地に「王家の谷」を出現させた謎は何だったのだろうか。

☆双子塚古墳（国史跡、同）

珍しい双方墳（連結した方墳）で、いずれの墳丘も一辺二五メートル、全長約五十メートルの双子山である。各墳丘とも南面する短い羨道の横穴式石室があるが、北東側の石室のみ凝灰岩製のカマボコ形屋根の石棺が見える。大化の薄葬礼に準拠した七世紀中頃のものである。双子塚古墳の墳丘上からは北西のほぼ正面に、女帝陵にふさわしくきれいに整備された推古天皇陵（磯長山田陵、山田高塚古墳）が望める。王家の谷は平

☆伝小野妹子墓と科長神社（同）

科長神社付近は古代豪族息長氏の旧地と伝えられ、そのうちの小さい塚の一つをイノコ（猪子）と呼び、いつの頃からか転化してイモコと呼ばれるようになった。大正時代、種々のいきさつを経て、聖徳太子や推古天皇陵に近いこの地を妹子の墓としたもので、史料の根拠はないが、「王家の谷」を一望に望めるこの地に墓を与えられた小野妹子、もって冥するべきであろう。

この墓のすぐ下に、三間社流造の立派な本殿を持つ科長神社がある。もとは二上山にあって、二上権現と呼ばれたが、鎌倉時代にこの地に遷された。風の神、級長津彦命・級長津比売命をはじめ、天照大御神・素戔鳴命・天児屋根命・武甕槌命・経津主命・建御名方命・応神天皇など多くの神を祀り、磯長地方の惣社の神社で、先住支配者息長氏の祖神を祀った古社といわれている。

☆葉室古墳群・近つ飛鳥博物館（太子町葉室・一須賀）

整備された葉室古墳公園を経て、すばらしい石造現代建築を誇る「近つ飛鳥博物館」を見学。古墳について徹底的にこだわる資料展示に圧倒され、雨でいっそう賑わった館の雰

囲気に心地よい疲れを覚えた。

博物館を出た辺りで本降りになったので、本日のメイン行事の高取城登山は断念し、旧竹内街道沿いの小さな道の駅で昼食を取った。

☆竹内街道資料館（太子町山田）

竹内峠（標高二八九メートル）、かつての大和・河内の国境を東西に貫く現国道一六六号線、古代の都と難波を結ぶ官道、幾多の歴史の織りなされた道にふさわしく、ローカル資料の多い資料館であった。

降りしきる雨について、夢を古代にはせて竹内街道をひた走り、ラッシュを避けて抜道を通りながら懿徳天皇陵、安寧天皇陵を車中より眺め、檀原考古学研究所（檀考研）付属博物館へと向かった。

☆檀考研付属博物館（檀原市畝傍町）

一九四〇年（昭和十五）、大和国史館として発足し拡充され、一九八〇年（昭和五十五）、現新館に移る。奈良県下の原始時代から中・近世までの文化遺産を系統的に展示し、模型や説明図も多く、充実した博物館である。

今回の旅のもう一つの目的は、ここに一般展示される黒塚古墳出土の銅鏡を見るためである。特別展示室で黒塚から出土した三四枚（うち三枚は研究所で公開）の三角縁神獸鏡

をつぶさに見ることができた。

卑弥呼の鏡と騒がれている鏡は、思いのほか鏡面が薄いのに驚いた。あれだけの型式の違いと多様性、魏の皇帝が「おうおう、よう来た。これを取らず」と機嫌よく気分に向くままひよいと渡したもののようには思えなかった。一枚一枚の鏡が一七〇〇年前の歴史をじつと秘めたもののように思えた。目まぐるしい探訪の行程のすべてを忘れて没頭した一刻であった。

そして常宿「千輪荘（檀原市河西町）」へ。快い眠りについた。

第二日目（四月九日）早朝六時半スタートで、宿舎の裏山一帯の新沢千塚古墳群と益田の岩船を朝食前に見学した。快調なスタートだったが、小雨模様は相変わらずである。朝食後、次の史跡を探訪したが、内容は省略し、史跡名のみ紹介する。

☆久米寺☆檀原神宮☆マルコ山古墳☆キトラ古墳☆於美阿志神社（桧隈寺跡）☆高松塚古墳・壁画館☆弥勒石☆飛鳥水落遺跡☆藤原宮跡☆奈文研飛鳥藤原宮跡発掘調査部の展示室☆吉備池廃寺（百済大寺跡）☆纏向石塚古墳☆大和神社☆奈文研平城京跡資料館☆復元なった朱雀門。快い疲れを覚えながら一路帰途へ。運転手さんほんとにご苦労様でした。

「白」について

佐藤 壽夫

まず、平凡社発行の「字統」(白川静著)には、おおよそ次のようにあります。

わたしたちが日頃使用している漢字のなかに「白」という字があります。現在では「白」といえば、ほとんど人は「シロ」「ハク」「ビヤク」などと読み、もともとの語源がどうであったかということは考えずに使用しています。こうしたこと他にもたくさんあって、たとえば「翡翠」などもそうです。

白 ハク しろ・あきらか・もうす 象形 頭顱の形で、その白骨化したもの、されこうべの象形である。ゆえに白の意となる。(中略)白はその頭顱の皤然として白いことから白色・明白・潔白の意となり、そのことを主張する意から告白・自白の意となる。

また、学研の「漢和大辞典」(藤堂明保編)を調べると、

翡翠といえ、たいていの人は寶石のヒスイのことだと思っています。ところが、翡翠はもともと鳥の名前なのです。では、どのような鳥なのでしょうか。実はあの美しい「カワセミ」のことなのです。

白 ビヤク (呉音) ハク (漢音) 解字 どんぐり状の実を描いた象形文字で、下の部分は実の台座、上半分は、その実。柏科の木の実のしろい中身を示す。(中略)

「翡」はカワセミのオスで、「翠」は「メス」です。いずれも美しい羽をもつので、二字とも部首に「羽」を含んでいます。

古訓 イチシロシ・カタチ・カタラフ・カナフ・キヨシ・サカツキ・シロシ・スサマシ・スナホニ・トトノフ・マウス・モノカタリ

カワセミは背が緑青色系の鮮やかな色で、腹の栗色との取り合わせが涼やかな感じです。宝石の色がカワセミの羽の色に似ているので、その字を借用して「翡翠」と呼ぶようになったのです。面白いですね。

さて、本題の「白」について調べてみました。

などとあり、母字を下に持つ熟語として、太白・半白・自白・空白・表白・明白・建白・独白・面白・飛白・純白・素白・精白・黄白・黒白・堅白・敬白・斑白・廉白・精

白・潔白・鮮白があげられています。ところで、この「白」という字をお隣りの国の文献で調べてみると意外なことがわかります。韓国の文学博士、鄭光氏が提唱されている「吏読(イド)」方式によって「三国遺事」に掲載された文献に現れる「白」の読みを解釈すると左の囲みようになります。

また鄭光氏が吏読によって「白」を分析した大略は次のとおりです。

- ①サルバ・サルプ・サルオなどと読み、「告ぐ」「申し上げる」の意に用いる。
- ②ザバ・サルプタ・サヲなどと読み、

「います」という謙譲接尾辞として用いる。

- ①の「告ぐ」「申し上げる」を意味する古代朝鮮語、サルバを吏読文では「白」と書いてきた。近古にいたり、軽く発音すると「オ」になったり、音にならなくなったりした。すなわち、

1. サルボタ↓サルオタ↓サロタ
2. サルプタ↓サルプ
3. サルタ↓サルイ↓サリ (白是)

②の述語の次につけて謙譲接尾辞として使われ、これは古語「ザバ」で「ます」にあたる。これも近世にいたり音が変化して強く発音すると

- 一、(第二春節己)只年了兮聞造
成是不徳為犯由白去乎等用良
(浄兎寺五層塔造成形止記)

- 二、置軍兵整齋江口待變為白乎玆
(王狀一)

- 三、我國軍兵恐或趁不人來為白乎
乙去此處方為苦待
(潘名啓戊寅八月)

- 四、逆謀參知為白乎所万万無理
(光海 趙偉韓招)

- 一、(來年の春までに完成せよとの命を受け)成すことができなかった理由を申しあげたことにより
(浄兎寺五層塔造成形止記)
- 二、軍兵を整備して江口に配置し、變乱(異変・乱)に備えて待機しておりました
(王狀一)
- 三、我國の軍兵が恐れているので(司令官の)後を追って參られたいのではなからうかと心苦しく待ち
(潘名啓戊寅八月)
- 四、反逆に参加し(そのことを)申し上げることは絶対に無理であり
(光海 趙偉韓招)

「ス」になり、軽く発音すると音にならなくともあつて次のようになる。すなわち

1、ザバ↓サオ

2、ザブ↓アブ（縮めて発音されたもの）

さて、これらを念頭に置いて、日本語の「白」の語源について考えてみることにします。

結論からいえば、古代韓国語の古訓は「サロ」（「シヨロ」「シヨ」も）で、これが「白」の日本語「しろ」の語源だと私は考えています。「白」が「サロ」と訓読みされるのを利用して、吏読表記は「白」という漢字で「言う」「言うこと」など古代韓国語「サロ」「サル」「サルプ」「サプ」を書き表しました。韓国の古代文献にたびたび登場する表記です。韓国では、敬語の吏読表記として昔は「賜」やがて「教」そして次第に「白」が多用されるようになります。

日本では何故か昔は「猿」やがて「白」が多用されます。古代、「猿」「猿」が「言う」の意味に用いられ、通訳を猿田彦とか柿本臣猿（私は柿本人麻呂だと思っています）と表記されているのを、いまだに日本の学者は気づかないでいます。

古代、日本で「サルプ」の表記に「猿」という字が用いられた日本独自の工夫は大変興味深いことです。

ところで、日本語の「白状」「白」などの「白」は「言う」の意味です。ところが、これが盲点になっており、多くの人が「白」を「潔白」の意味であると思い込んでいます。

しかしよく考えてみると、白状は自分が悪かったと認めて言うことだし、白自は自らその罪を言うことです。潔白だと言い張ることではありません。黒を白だと思っているのですから、まさに逆さまです。語源がわからないのは悲しいことです。

「白」という漢字そのものがすでに「言う」の意味を持っていることは【字統】『漢和大辞典』でみたとおりです。うっかり見過ごしているのにもかかわらず、私たちは「白」が「色が白い」の意味の他に「語る」「述べ」の意味をもつことを潜在的に知っていて、巧みに使い分けたり、時には二重の意味を持たせたりして、これも興味深いことです。

次に「白」が「言う」の意味をもつ例を示してみます。

（科白）

セリフの語源は「サルプ」。セリフは台詞・科白と書きます。いつごろ生まれた言葉かわかりませんが、さ

して古い言葉ではないと思います。

セリフに台詞という字をあてたのは自然です。「台本」「台詞」という対語として理解しやすい。もともと「台詞」の由来については舞台台詞の略だと言う人もいます。興味深いのはもう一つの「科白」の方です。

「科」は条目・決まりのことですから「あらかじめこう言う」と決められた言葉のことで、ここにもはつきり「白」言うが息づいています。

（白人・白子）

これは大変古い言葉だと思っています。「白人」「白子」の訓みはわかりませんが、神様にめでたい言葉、祝詞を捧げる人は「白人」「白子」と記したことだけは記録に残っています。

祝詞は神に祈るとき神主で神前で読み上げる古めかしい、主に祝いの文言です。また口寄せ（霊を招き寄せてその言葉を人に伝えること）などをします。ここにも白が生きています。

（白拍子）

白拍子、祇王（伎王とも）の悲話是有名です。平清盛に愛され、そして捨てられ、二十代という若さで出家した白拍子。『平家物語』の作中人物ですが、実在の人物でしょう。嵯峨には祇王寺があります。

この白拍子について辞書を引くと

「平安末期に始まったという歌舞で、それを舞う遊女のこと。白い水干をまといて舞ったから白拍子という」と説明していますが、果たしてそうでしょうか。白拍子の白は「語り舞い」のことではないでしょうか。調べればまだまだ沢山あります（白洲・白波・普呂利新左衛門など）。

では、昔は何故「猿」「猿」なのでしょう。

（猿丸太夫）

百人一首の中に見える「奥山に紅葉踏分けなく鹿のこへきときぞ秋はかなし」の作者、猿丸太夫という人物も「サル」、即ち言語の師範的立場にあった人であることがわかります。子ども心に、猿丸太夫なんて変な名前の人がいるものだと思っていました。が、鄭光氏の吏読によつて「猿」か「サル」の当て字であることが分かって納得しました。

猿丸太夫も人麻呂のように舍人であり、バイリンガー（二ヶ国語を話せる人）であり、言語の指導的立場であつた人なのでしょう。

猿がサルオの当て字であるという認識は「その時代」とはいえ猿丸太夫も生没年不詳で、万葉歌人よりやや後代ということしか分からないのですが、にも生きていたことが分かります。

「猿楽」「稗田阿礼(アレ)とサレは同語」や「柿本臣猿」「猿田彦」「猿女君」などについては後日機会があれば書いてみたいと思います。「古事記」を徹底的に読む「歴史研の学習が楽しくて楽しくて勉強しています。多くの仲間を支えられて――」。

ヘルマン・ヘッセの水彩画

石井 しおり

ドイツ生まれで、後に第一次世界大戦以来スイスに移住した作家、ヘルマン・ヘッセの晩年の水彩画の前に立つと、とめどなく自然の光を感じ、透明な色彩が暖かく胸を打つ。彼は一八七七年、南ドイツのカルフの町に牧師の子として生を享け、やがて神に仕える道を選んで神学校に籍を置いた。しかし途中で心の嵐に見舞われ、学生寮から脱走退学してしまった。

それ以来、工員や書店員をしながら文学修業に励み、一九〇四年「郷愁」の出版で、一躍流行作家となった。続いて「車輪の下」「春の嵐」「湖畔の宿」を著わし、作家として不動の地位を占めるに至る。

その後、二度の世界大戦では常に

反戦を唱え、ヨーロッパの精神的沈下を訴え続けた。当然、四面楚歌の中に追い込まれ、社会から孤立してしまつた。信念のために日々の生活にも困窮し、死さえ考えたその時、それは四十歳過ぎのころであろうか、独り南アルプスの山麓で自然の光のなかに座って、山、雲、樹木、湖水と対話しながら絵筆を握る。

この画業は根柢からの素人の出発であつた。透明な自然のなかの光こそ、苦しみを耐えしのび、自己の確立と癒しの作業であつたことが、深く感じ取られる。

苦難ののち、彼は第二次世界大戦後、ノーベル文学賞を受賞する。この栄誉は、彼に更に深い思索へと進ませたことであろう。

なお、ヘッセは日本に宣教師として滞在したグルデンという従兄弟を持つ。その彼は、臨済宗の重い経典「碧巖録」を訳してその存在を世界に紹介した。

ヘルマンはグルデンを通して日本を熟知し、日本固有の文化に憧憬さえ抱いていたという。わが国を深く理解したヘルマンと、その著作を広く愛するわれわれの間には、何か奥深く、心の襞に繋がる憂愁の詩情があるのかも知れない。

平成十年六月十二日

追記

この一月余り入院生活を余儀なくされました。退院後も心の重心を失つたような日々が続いておりまして、失つたところへ、友人から「快気祝いにヘルマン・ヘッセ展へご案内します。おむかえに車を出しますから待って」と、うれしいお誘いがありました。展覧のあと、すばらしいヘルマンの人生と、瑞々しい友情に囲まれて、私の私を感じる日々でございます。

ハハキは掃除道具か？

門田 幸男

「古事記」を読む講座は現在、天若日子(高天原から国譲りの交渉に葦原中国に派遣されてきた神)の段までできている。この神が死んで葬儀(殯)を行なうとき、河鴈のきささり持ち(意味不詳)などとともに、鷺がハハキ(箒)持ちとして登場する。「古事記」の解説本を書いた国文学の先生は、ほとんどの人が鷺を掃除係に任命しているが、ほんとうにそうなのだろうか。

備中や備後の北東に隣接する地方は「伯伎(ハハキ)」と呼ばれていた。これは昔の発音で、今は「伯耆」と書いてホウキの国という。発音は

確かに掃除道具とまったく同じだが、単なる掃除道具が国の名前になるはずがない。

国文学の先生が、鷺を掃除係だという根柢は「古語拾遺」という本に「海神の女豊玉比売が彦瀲尊(古事記)では天津日高日子波限建鵜草葺不合命、日本書紀では彦波瀲武尊(鵜草葺不合尊)を産んだとき、海岸に室を立て箒を作りて鷺を掃う」とあることで、ここからハハキは昔から掃除道具だったという誤認が生まれたのである。

海神の娘だから海岸に産屋を建てたのも、また鷺が近くにいても不思議ではないが、産気づいてから造られる産屋(ちなみにウガヤフキアヘズという名は産屋を建てる「葺く」の間合に合わなかったという意味)に鷺が掃いて追われるほどいるはずがない。

そうでしょうみなさん。

鷺はご存じのように脱皮しながら成長する。そこでこの脱皮新生する特性にあやかっ、まだ確かなでない新生児の命をしっかりとこの世のものとする意味で、沖縄では、誕生後五日間の産屋での籠もりを終えた満座の日に鷺をはわせる呪術が行なわれている。だから鷺は偶然寄ってきたのではなく、わざと捕まえてきたもの

なのである。最後には追い払うかも知れないが、邪魔ものではなく呪物なのである。蟹に意味があるように、箒もまた単なる掃除道具ではなく、呪物に相違ない。

よく知られているのが玉箒である。

大伴家持の詠んだ歌に
初春の初子の今日の玉箒^{たまはら}

手に取る程にゆらぐ玉の緒

がある。正月子の日の祝宴で引出物として天皇から下賜されるものだが、ここで少し立ち止まって考えてみたい。

子の日とはいったい何か。子は方角では北を指す。その北は後天易でいうと「坎(穴)」である。穴は即ち凹んだところ、籠もりの場所である。つまり、新生児の籠もる産屋にハハキがあるように、子の日に出てくる玉箒も新生の命の誕生に関わる呪物なのである。

その気で見ると、玉箒の名のとおり、着いている玉を単なる飾りではなく、命の別名の魂と見れば、玉箒とは、子即ち坎(穴)とセットにされるにふさわしい男性の象徴と推定できる。女性の象徴の日(子の日||穴)に男性の象徴を手に入れば、睦月と呼ぶ正月にふさわしい呪物であるに違いない。

だからこそ、大伴家持が感謝の意

を込めた歌を詠んだのだと考えられる。歌の意味は、玉即ち魂が揺れ動いて(これをタマフリという)生命力が奮い立ってきます、といったものである。

玉のつかないただの箒でも「広辞苑」を引くと、「信濃の蘭原にあつて、遠くから見るとあるように見え、近く寄って見ると形が見えないという伝説の木」とある。ともかくハハキには霊のイメージがまわりついている。

戦後しばらくまで信じられていた居据わった客を早く帰らせる呪いに、箒を逆さに立てて手拭い(垂のつもりらしい)を被せるといふのがあった。この逆さの箒がどうやらハハキであつたらしいことは、信濃の伝説で不思議な樹木となつていたり、玉箒も柄がないが、穂先を上にして立ててあることから推察できる。

ここで箒がどんな場面で登場するか整理してみると、葬式(霊が肉体から離脱してあの世即ち霊界へ移るとき)とお産(霊界から人の命が渡つてきて新生児に宿ると考えられていた)という、生まれた、死んだの命の土壇場に登場することがわかる。次に玉箒が現れる正月について考えてみる。

戦前は数え年といつて正月に日本

国民全員が年を取った。だからばはやしてしていると「正月は冥土の旅の一里塚 めでたくもありめでたくもなし」ということになる。そこでどうしたかといえば、正月の初めての子の日に東(太陽が生まれる方向)の野に出て飯屋(トンド小屋として残る)とか穴ぐら(カマクラに残る)に籠もった。このことは

春日野は今日は焼きそ 若草のつまこもれり われもこもれり

(古今和歌集・一七)

引きてみる子の日の松はほどなきをいかでこもれる千代にかあらむ

(拾遺和歌集・一〇二三)

などによつて知られるが、では何のためにという問いが浮かんてくる。

民俗学者の吉野裕子先生によれば、

飯屋や穴ぐらは擬似母胎で、ハハキは男性の象徴であり、産屋は正方向、喪屋は逆方向の擬似母胎だということ。また、「古語拾遺」には「大蛇のことをハハという」とある。ご存じのとおり蛇の頭は男根に相似であるから、

蛇樹が男性の象徴であつてもまっくおかしくない。

元祖ハハキは沖縄で御神木とされる蒲葵・檳榔(和名ピロウ、古和名アジマサ)である。この木は椰子科の一種で、枝別れのない一本棒の幹なので母なる大地に突き刺さった神

の男根に見立てられたのである。

正月子の日の穴や飯屋などの擬似母胎に、男性の象徴のハハキが寄り添うことで擬似妊娠が成立し、その結果生まれ変われば新生児なので絶対若い。だからこそ正月がめでたいのである。

このようにハハキと命は深く関わっている。このことを見過ぐすから誤りを犯すことになる。

また、沖縄では蒲葵の葉を切り取つて呪物として使用されていた。

これが後に桧扇・紙扇と進化して神事や改まった席での必須の小道具になつていりし、熊野那智大社や黒川能て有名になつた山形県鶴町町の春日神社の御神体にもなつていりことは周知の事実である。

つまり、ハハキが蛇樹である認識が失われたときに掃除道具になつたのであつて、国文学の先生はまさに「箒を作つて蟹を掃う」の一言に囚われてしまったということだろう。

逆さの箒の呪いについて一言。

家屋という擬似母胎から生まれ出ない擬似胎児(長居の客)を屋外に産まれ出させるには、男性の象徴であるハハキがないと擬似妊娠が(したがって擬似出産も)成立しないからと考えれば理解できると思う。

最後に、伯伎の地名が「母(イザ

ナミ) 来) からきたという説もあるが、たとえ地名の説明ができてても箒の説明はできない、とでもいつておこう。

歴民研の例会

岡山の西大寺から牛窓へ

小島 袈婆春

平成十年四月十九日。昨夜までの連日の雨降り天気はカラリと晴れ上がって絶好の例会日和となった。

不思議な事と思うのだが、備陽史探訪の会の行事には雨の間の一日が与えられる。

昔はそれを「継子の洗濯日」といったのだそうだ。

☆西大寺(岡山市)

つい錯覚してしまうのだが、西大寺とは地名なのである。

もちろん、昔から栄えていた寺の名称を転用したのであるが、昭和二十八年市政を施行、昭和四十四年に岡山市に編入するまでは西大寺市という単独の市であった。

さて、裸祭りとして全国的に有名な祭りが催されるのは、観音院という寺で、例会の資料によれば、昔は数多くあった西大寺塔頭の内、唯一残った寺だそうだ。

伽藍は三重塔が江戸時代初期、他

は同末期とのこと。変わっているのはその配置で、西から山門を入ると東の突き当たりに建つ真言宗別格本山の本堂は南を向き、途中の三重塔は東向きと、建物がそつぽを向き合っているのが面白かった。

裸祭り(正確には会陽)は旧暦の年始の法会の結願を締め括る行事で深夜に内陣上部の小窓から投げ出される雌雄一対の宝木を下帯一本の男達が奪い合う勇壮な光景はテレビや写真でお馴染みと思う。

私はお札所の女性に教えられてその窓をカメラに収めたのである。

☆乙子城(岡山市)

吉井川左岸の河口近く東から断続する小丘陵を利用した小山城で、北から望むと前方後円墳の様に見える。

天文十三年(一五四四)、年十六歳の宇喜多直家は、主君浦上宗景から三百貫の領地と足軽三十人を与えられ、当時最前線のこの小城の守備を命じられたという。後年戦国の梟雄と呼ばれた宇喜多直家の出発点となった城なのである。

以後五年間、数々の攻防戦を凌ぎ切つてこの孤塁を守り抜いたのであるが、僅か十六歳の少年がただの足軽三十人を使ってどの様な戦いの仕方をしたのか。今この丘の上に登って彼方此方と歩き回ってみても私に

はなかなか理解できないのであった。

子城に集まって来て直家の支えとなったのだそうだ。

☆砥石城(邑久町)

乙子城跡から北東約5km、邑久町豊原の砥石山(標高約100m)にある。山頂を南北に細長く削平した本丸を中心に幾つかの郭跡が続くが、本丸以外は明確ではない。また、この西側の谷を隔てた尾根に出丸と呼ばれる、ほぼ同規模の郭群があつて、二つを併わせて砥石城と呼ぶのだそうだ。

「積善の家に余慶有り」。宗教職の方々が好んで使いそうな箴言から転用したと思われる寺名だが、山号は「上寺山」というのだそうだ。

かつてこの城は、備前守護浦上宗景の重臣で、北方一帯、眼下に広がる穀倉地帯の千町平野を領有し、先にあげた宇喜多直家の祖父である能家の居城であつた。

この寺は周囲一帯に広がる邑久町の、千町平野の穀倉地帯に立地している故か、地方では珍しく塔頭が六院も境内に集中し、それぞれが栄えているそうだ。バスは最上段に立つ国重文の本堂前の広場に直接到着するので、個々の子院のたまたまいを鑑賞するのはなかなか難しい。

能家が老齢と病身で引退した天文三年(一五三四)、南の峰続きに存在する高取山城主で同僚でもある島村豊後守の突然の夜討を受けて身体不自由の能家は自害し、当主の興家は直家と離れ離れとなつて備後鞆に逃れ、宇喜多家は破滅したのである。

後で聞いた話では、重文級の庭園を持つ子院もあるそうだ。

甲斐性のない父興家に代わつて当時六歳の直家を育て上げ、旧主浦上宗景の小姓として出仕させたのは母の助けであつたといわれている。

私はこの寺は二回目で、前回は今は亡き立石先生のご案内で、宇喜多家関係の遺蹟を訪ねた時である。

その頃先生は充分にお元気で、独特の切れのよい説明をなされた事が懐かしく思い出された。

懐かしく思い出された。

☆竹久夢二美術館(邑久町)

歴史民俗学は裾野の広い研究分野なのである。大上段からの芸術論でなく、一般庶民生活の中にすつと入り込む文化——明治・大正期の美人画も江戸期の浮世絵も、今に到って見れば、世界的に美術作品として高い評価を得ているものも数多い。

歴史民俗学は裾野の広い研究分野なのである。大上段からの芸術論でなく、一般庶民生活の中にすつと入り込む文化——明治・大正期の美人画も江戸期の浮世絵も、今に到って見れば、世界的に美術作品として高い評価を得ているものも数多い。

竹久夢二氏の作品もその一つに違いないと思うが、なんとなく村起こし、町起こしの感じがなくてもいい。夢二氏の生家をそのまま展示室にした事にもそういえるが、岡山市内にも別に「夢二美術館」があるそうなので、ここはこれで納得できた。

私は家内の土産にと思って夢二作品の模写を物色したのだが、淋しく儚く美しくそして恨めしく、一寸手が出なかった。

☆静円寺本堂（真書宗、邑久町）

東側に立つ門を入ると広々と荒れた感じの庭？があつて、正面に入母屋造・本瓦葺の堂々たる建物があつた。梁間・桁行とも五間と資料に載っているが、一間の内回廊がぐるりと廻っているので一際雄大に見える。しかし、何故かその雄大さが心に響かず、ガランとした倉庫の様な印象を受けた。

堂の左右に渡り廊下で結ばれた小堂がある外は、寺につき物の書院とか庫裏などの建物は無く、近寄って観察してみると、相当傷みが進んでこのままの使用は無理のようであつた。

唐棧戸の隙間から覗いて見ると、仏像等は置いてある様なので、先程の倉庫の様な感じがしたのは「魂抜き」がしてあるからであろう。

なおこの堂には、天正七年（一五七九）の棟札があるとの事で、建築年代は判明しているが、もと西側の山上にあつたものを江戸期中ごろ現在地に移転したのだそう。

☆静円寺多宝塔（同）

本堂の北側、ただ広い草原にポツンと淋しげにそして優雅な姿で佇んでいる。

本造、初層は三間の方形、二層は漆喰等で円形に仕上げ上部に勾欄を廻してある。二層の屋根は宝形造。初層に屋根が付いている場合を多宝塔と呼ぶのだそうだ。

一般に真言宗系の寺院に多い建物で、この塔は江戸初期の建築だそうだが、本堂とともに岡山県重文とのことである。

☆朝鮮通信使館（牛窓町）

以前は警察署の建物だったそうだが、思いの外の瀟洒な雰囲気、白ペンキの外観が、明るい港の風景によく溶け込んでいた。道路の南は広々とした牛窓の港、沖合に一直線の防波堤、左の端はフェリー乗場。私は海が好き、こういう所で釣り糸を垂れたら一日中飽きない。

さて、館内には祭りに使う実物の船だんじりが三台、置場兼展示用として並べてあつた船首の彫刻が見事であつた。

この建物の正式名称は「海遊文化館」。朝鮮使節や祭りの様々な資料が沢山展示してあつた。私はここにしか無いと思われる「唐子踊り」の解説書を見付けて一冊購入した。

☆本蓮寺（牛窓町）

海遊文化館のすぐ後、山腹に建立されている。山門を入って突き当たりが客殿で、福山市の浦の福禪寺と同様、朝鮮通信使の宿舎となつた建物との事である。

客殿前の右手に国重文の中門があり、その内側に明応年間（一四九二年～一五〇〇年）建立の国重文本堂と番神堂、県重文の三重塔、祖師堂の外、鐘楼などが立ち並んでいた。額の福禪寺と異なり、堂塔伽藍が整って管理も行き届き、栄えている様子は港の周辺に寺院が少ないからかも知れない。

さて、今回のバス例会は申込者が多かった事を考慮してバスを一台追加配車して頂いた。お陰を以て私も参加することができて実り多い一日を過ごし、誠に有り難い事であつたが、役員の皆様は誘導や解説、時間配分等で数倍のご苦労をなされた事であろうと、感謝とともに厚くお礼を申し上げる次第である。

一九九八年五月

『額の浦自然と歴史』を 会で販売

先頃、新聞でも紹介されたように、六月一日に福山市額の浦歴史民俗資料館活動推進協議会から「額の浦の自然と歴史」が発行されました。編集は福山市額の浦歴史民俗資料館額友の会が担当しています。

内容は、タイトル通り、額の自然について触れた第一部が「名勝額公園」で、歴史は第二部以降、「万葉集と額の浦」「中世の額の浦」「朝鮮通信使と琉球使館」「七卿落ちと額の津」と続いています。

また、第六部では「額の津を訪れた人たち」として平賀源内や頼山陽らが取り上げられています。湊町額としては第七部で「額の津の港湾施設」があり、民俗分野では第八部の「額の津の石造物」があつて、実に多彩な内容になっています。最終一部には「額の史跡めぐり」として史跡めぐりのモデルコースを載せるなど、まさにいたせりつくせりです。

この冊子（一部一〇〇〇円）も額の浦歴史民俗資料館から販売依頼がありましたので、これから会の諸行事で販売していきます。売り上げの一部は会の収入となりますので皆様のご協力をぜひお願いいたします。

木曾氏の祖は義仲なり

柿本 光明

名古屋より木曾福島まで特急で一時間半、そこからバスで昔の中仙道（ひょうしんどう）を走り、長野県木曾郡日義村（ひよしむら）の教育委員会を訪ねた。飛驒山脈と木曾山脈の間を木曾川が流れ、それに沿って中央本線も国道も走っているのだ。私が今回この木曾郡日義村を訪ねることとなったのは、『西備名区』巻之七十九御調郡向島東村の項（一七二三頁）に次のような文章を見つけたのに端を発する。

木曾二郎義重

太夫坊覚明に扶助せられし木曾殿の孤成長して此に住し木曾三郎義重と云。木曾原は義重居住の跡なり、今に子孫残れり。

義重の墓

木曾原にあり。其処に大松一幹あり、是墓印なりとも云。

太夫坊覚明、其先は 清和天皇の皇子滋野親王九世の孫、海野信濃守滋野幸親の男なり。勸学院に入て学道進み、文章博士進士蔵人頭通広と云はれし是なり。後、比叡山に上りて出家し、慈鎮和尚の門に入り浄寛と号せり、其後西乗坊

信教と云ひ、儒教両学に富み能書なる故、南都に祐筆して太夫坊覚明と号す。高倉宮の御謀叛の時、三井寺より南都に牒状を送れり、其辺牒を覚明書せりとて、大政入道浄海是を討果すへしとて、嚴数訊求めける故、南都に住みかたなく、出て美濃に趣き、新宮十郎蔵人行家に属しけり。行家、伊勢皇太神宮へ献る祭文を書せしむ。其後、行家右大将頼朝卿と不和にして快からず、去て本国信州に帰り木曾義仲に従う。義仲発興せられ平軍と対戦の砌り、垣生の新八幡へ献る願文を書せしむ。此文、覚明一世の肝膽を吐し名文とて世に称せり。木曾殿滅亡の後、此にかの義重を助けて暫止り、義重成長の後、念仏門に入て西仏上人と号し、又信州に帰り、塩崎白鳥山康楽寺を開基し、寿八十五才にして、仁治二年正月二十八日に寂すとぞ。木曾は覚明帰りし後、義重も成長にて、右大将頼朝卿も逝去の後故、嫡子某、信州に帰り住む。後世の木曾氏は此義の子孫なり。此に重の墓ある事は、義重は此に死し、其嫡子は信州に帰り、次子某此に残り子孫あり。中世中山と称し、又木曾を称するもあり。世々此嶋を領して、後、河野に属し、又村

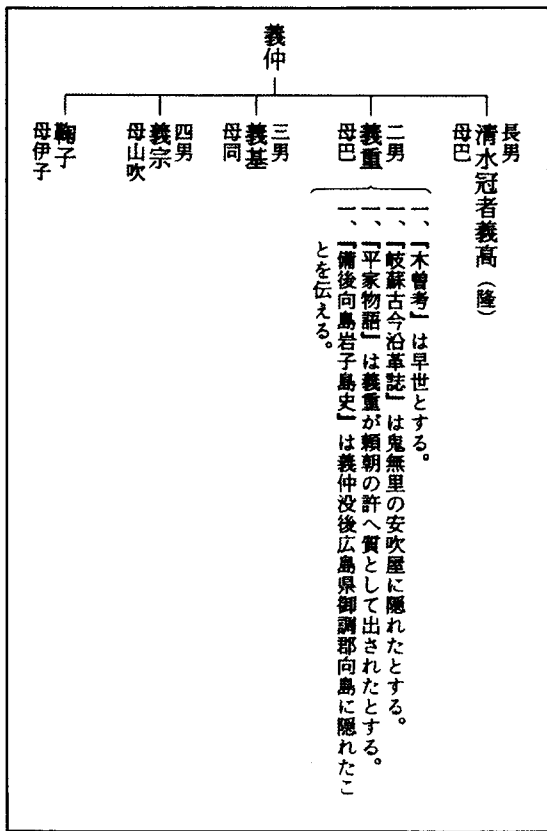
上に属し、後、家おとろへて武を止め處士となり今子孫数家ありと云。

また『備後風土記』巻之四御調郡の項（六五頁）にも次のようにある。

向島、川尻の郷に覚明荒神といふ社有、農業の守護神とす。村老の説に、太夫坊覚明の庵室の跡たるよし。太夫坊、粟津合戦の後、木曾殿の孤を抱き、此辺に沈落せらる。成長の後、木曾三郎義重とい

ふ。其住居の跡、今に木曾原という則、義重の墓ありと、宮地孝如（故人）かたたる。

この子孫ともいふべき「木曾」姓を名乗る方を電話帳で調べてみると、『西備名区』『備後風土記』などで「木曾原」というところと書かれてある御調郡向島東村（現尾道市向東町）に五三戸、同郡向島西村（現向島町）に一四二戸あり、また、時を経て他所に移住されたものと思われる方が尾道市に一一五戸、因島市に



四戸、福山市に五二戸あった。
 『芸藩通史』巻九九備後国御調郡の
 項八六六頁には次のようにある。

木曾三郎義重の墓

向島東村、木曾原にあり、義重は、
 覚明が、護養せし義仲の孤なりし
 といふ、其他古墳多し、共に木曾
 氏、遺族の墓なるべし、
 三十六名墳

同村（筆者注 向島西村）王太子
 山にあり、土俗の説には、昔三十
 六人して、此島の地を開く、故に
 三十六の五輪石を建つ、其麓に、
 一宮明神をまつるといふ、当島の
 神祭に、両社八幡七社明神、三十
 六苗荒神と唱て、餅酒を供すとい
 へり、謂ある事なるべし、

そこで木曾三郎義重が、はたして木
 曾義仲の孤であるかをこちらで調べ
 てみると、『松永本郷町誌』では、

木曾義仲―阿曾義久―義長―義正
 阿曾近江守義久は義仲の二男、奥
 州松野山武姫城に居城し、阿曾治
 郡、行方郡、菊田郡、信夫郡全四
 郡を領したという。

【群書系図部】二巻四四〇頁に次の
 系図が載っている。

義仲―義隆（清水冠者）

―義基―義茂―基家―家仲：

また『群書系図部』二巻二六九頁
 に掲載された系図は次の通り。

義仲―義隆（清水冠者一説義重）
 ―義基
 ―義宗

さらに『尊卑分脈』第三編二九〇
 頁掲載の木曾家系図はこうだ。

義仲―義隆（清水冠者）
 ―義宗（木曾四郎）

元暦元年（一一八四）正月二十一
 日、木曾義仲が頼朝の鎌倉勢と戦つ
 て栗津原に三十一歳の波乱に満ちた
 生涯を終えてから、およそ八一五年
 にわたる長い間、木曾義仲の子孫と
 称されている木曾氏の系図は、義仲
 から二十代義利まで記されたものが
 いくつかある。が、木曾三郎義重が
 何であるか知れたかった。

長野県は中部地方の中東部にあり、
 群馬・埼玉・山梨、南は静岡・愛知、
 西は岐阜・富山、北は新潟の各県を
 山地を隔てて接し、日本の屋根とも
 いうべき県で、数個の盆地を除けば、
 平地に乏しく山地は険しい。日義村

教育委員会の方に聞くと、木曾のこ
 とは長野県歌の歌詞にもあるので、
 木曾は信濃国と誰もが思っているが、
 実は古代においては美濃国に属して
 いた、とのことであつた。

今は木曾路と書くが、昔は吉蘇路
 と書いた。江戸時代は尾張藩に属し、
 中仙道の宿場町として栄え、明治に
 入って維新の廢藩置県でいったん名
 古屋県の管轄となり、明治五年には
 筑摩県に移管された。この間、宮ノ
 越村と原野村に分かれていたものを
 明治七年に合併。この地で平家追討
 の兵を挙げた朝日將軍木曾義仲にち
 なんだ「日義村」と命名し、明治九
 年、長野県の所管になったという。

日義村は長野県の西南、木曾郡の
 北東木曾川の上流にあり、急峻な地
 形をもつ木曾谷にあつては比較的緩
 傾斜地の多い所で、居住地の標高は
 八三〇mから一〇五〇mに及ぶ。村
 の西部を木曾川が北東から南西に流
 れ、南部には、木曾駒ヶ岳の北西山
 麓に広がる木曾駒ヶ高原がある。御岳
 山や木曾駒ヶ岳が一望でき、澄んだ
 空気と青い水、大自然に恵まれた旅
 情豊かな高原である。

木曾氏は木曾義仲を始祖とし、義
 仲から二十代義利までのおよそ四三
 〇余年の永きにわたり、代々義仲の
 子孫を称して一貫している。

木曾氏の系図には「木曾考」「木曾
 考統紹」「寛政重修諸家譜」「尊卑分
 脈」「日本系図綜覧」「岐蘇古今沿革
 誌」などがあるが、定本として確定
 したものがない。義重は義仲の二男
 （幼名力寿丸）で、母は巴とされて
 いる。『木曾考』『木曾考統紹』とも
 に義重は義仲の二男ではあるが、早
 世したとされている。
 これについて書いた「日義村誌」
 の記述をまとめると、おおむね次の
 とおりである。

一之宮神社
 （義重の館跡と伝えられる）



な文章が載っている。

木曾義重由縁地

「岐蘇古今沿革誌」には、義仲没後、義重は上水内郡鬼無里村の安炊屋に隠れたとされ、後に仁科森の城主一條二郎を頼み、「大野田」と称した。仁科を乱した阿部五郎丸を討って首をあげ、このことを鎌倉へ言上し、將軍頼恒（經）公へ謁した時、將軍家より木曾姓を賜った。そして大川村千足、大穴村三千貫の地を賜った。木曾次郎の印書を得て、信濃守に任じられたとある。

また「信府統記」（「信濃史料叢書」第六卷所収）にも、

木曾は源義仲の末葉代々領せり、其中に原信濃守義重は安曇郡に於て再家を起せり、其弟木曾の四郎（或は朝三郎義宗）是より義昌まで相続して、其子仙三郎と云ひし人の時家没したり。

とある。これによれば、義重は原信濃守として仁科を領し、木曾家は第四郎吉宗が継ぐように記されており、「西筑摩郡誌」の木曾氏系図も同様の記述がなされていて「木曾考」の記述とは違っている。（以上要約）

向島実科高等女学校の校長を務めた菅原守氏の編著「向島岩子島史」の向島東村の項四二二頁に次のよう

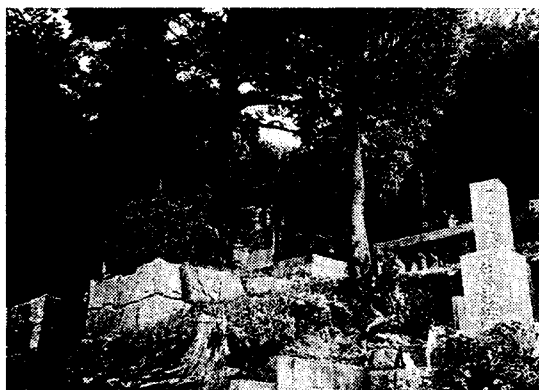
字木曾原に義重の墓ありしと称す地あり、元來義重の墓所と称する地向島として、向島西村字川尻寛明屋敷にありと云ひ、同村字江奥入道丸の古墳なりといひ、又茲に述べる向島東村木曾原にあつた等数説がある。孰れも今其の墓石を失いて判然としてゐない。江奥入道五輪塔には異説ある。だが義重が太夫坊覚明以下三十余人に伴はれて、川尻に隠れ、此地に育成し、土地を開拓し産業を先達し、此の島の領主たる一族を東村にも分ち威勢を張ると共に盛に神社仏閣を建立し、人心収攬に任じた事は尽くした事は記録によつて十分頷ける。而も長男は信州に帰つたが、次男以下は此島に留つて数代杉原、吉原、洪川、村上各氏に頼つて威を島内に張つたことは明らかで有る。依て此の木曾原附近も、義重の縁りの地たるは明らかで、義重の墓ならずとも其子か孫か一族のものの墓地として木曾原を定め、宗祖の墓を置いたのではあるまいか、今も老松一本を存し、明治の初年迄は五輪塔小墓数多ありしと云ふ、尚木曾氏の子孫を称す

る家もあり謂れある地である。

実は以前、右の文章をコピーしたものを日義村教育委員会の方に見せたところ、非常に貴重な文献だということ、日義村誌編集委員会が検討されて村誌に採用が決まり、第二章の「中世の動き」2義重（二男）の段に「広島県向島に隠れる」の項が設けられたのである。紹介者としてとても感謝している。

「日義村誌」（歴史編上巻）はこの六月三十日発行された。

三十六苗荒神（義重を守つて来た三十六人の墓と伝えられる）



会報八五号の原稿募集

原稿締切 九月二六日（土・必着）

ざりざりだと編集時間の関係で掲載できない場合があります。早めにお送りください。また原稿は一号につき一人一本に限り（厳守）。

原稿は本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三一行毎に一ページの一段になります。四〇〇字詰原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして、一行一六字にして書いて下さい。皆様の力作を期待しております。

今回は予算の都合上、一ページ半以内でお願いします。また、こちらで予定した頁数（一四頁）を超える場合には、今までもあまり書いていない方を優先し、常連の方に掲載をご遠慮願う場合もあります。

私のこの一冊

『陰陽五行と日本の天皇』

吉野裕子著

人文書院 定価二二〇〇円

私たちが考えている以上に、陰陽五行思想は日本の歴史・政治思想に強い影響を与えています。この本は吉野民俗学による天皇分析の集大成です。（推薦者 門田幸男）

ゆるぎ岩とクワの謎

平田 恵彦

石井六郎さんから、七月五日に高松で黒塚古墳について講演があるので行きませんか、とお誘いがあった。講師は河上邦彦先生（檀考研調査研究部長）とのこと。うむ。

実はその前週、十数人で妻木晩田遺跡に行く予定があつて大いに迷つたのだが、結局行くことにした。こうした事情があり、今回は僕の軽ワゴン一台だけ。石井さんが坂井先生を、僕は三好さんを誘つて四人で出かけることになった。僕が行く気になつたのは、一つは黒塚古墳の最新情報を得たかつたこと。もう一つは、講演が午後二時からなので、それまで史跡・寺社めぐりができること。そして前から坂出に絶対行つてみたい場所があつたからである。

その一つは沙弥島で（別の機会に書くつもり）で、もう一つは聖通寺山である。この山中には知る人ぞ知る「ゆるぎ岩」がある。この巨岩には、悪人が懸命に揺すつても動かないが、善人だと片手でも揺れるという言い伝えがある。僕はこうした類の話が病的に好きで、どうしても試してみたくなってしまうのだ。

坂出北インターを下りて県道を坂出市街に向かつて走ると「常盤公園」の案内板が出てくる。ここを右折し、しばらく登ると、塩釜神社という立派な神社がある。さらに登ると突然視野が開けて広場に出る。ここが聖通寺山の北のピークで、この一帯が常盤公園である。瀬戸大橋開通の際に建てられたと思われる展望台付の大きなビルがあるが、空きテナントもあつてどこか寂れた様子である。

ここにいたおじさんにゆるぎ岩のことを聞くと、わしが子どもの頃は動きよつたけど、いまはどうやら、という返事。若い男女にも尋ねると、やはり知つていて、クルマだと道が細いので歩いて行つたほうがいいと教えてくれた。

しかし、横着者の集まりはクルマで行けるところまで行くことにした。広場を南に下ると、道はまた登りになる。鉄塔の立つている聖通寺山城の本丸跡を過ぎると間もなく岩塊が見えた。なんだ、大丈夫じゃないか。いくつもの巨岩を囲うようにして近世のものらしい石仏が並んでいる。この岩塊が、風化作用によって露出した自然石なのは明らかだが、古代人はこれに神霊を感じ取り、磐座として祀つたのだらう。その伝統を受け継いでか、いまも祭祀が続いてい

るようだ。

ゆるぎ岩は果たしてどれか。それらしい一番上の丸細長い岩に登つてはみたものの、びくともしない。ああ、やつぱりいまは揺れないんだと思ひ、岩から下りて周囲を歩いてみると、三好さんがばくの登つた岩を右手で触つている。

「！」

動いた……。いま確かに動いた。

「三好さん、動きましたよ」

冷静を装つて僕がいうと、

「やあ、僕もそうかなと思つたんだけど、錯覚かな、とも思つて」と嬉しそうである。力を加え続けると、揺れているのが誰の目にも分かるほどになった。

これでは三好さんは善人だが、僕は悪人ということになつてしまう。それでは情けないので、もう一度やつてみたら――よかつた。僕も動いた。そのあと坂井先生も石井さんも全員善人ということ丸く収まつた。どうやら端の方に力を入れるとテコの原理で動くようだ。

探訪コースは三人が任せるといつてくれたので、勝手に決めたが、僕の目的はこれでオシマイ。あとは僕にとつてはオマケである。このあと、神谷神社（本殿国宝）・白峯寺（四国霊場八十一番、頓証寺）・崇徳天

皇白峯御陵・根香寺（四国霊場八十二番）・一宮寺（四国霊場八十三番）・田村神社・讃岐一宮）・石清尾山古墳群と回つたのだが、半日コースとしては目一杯だらう。

では肝心の講演会はどうだったかというと、余談が中心、黒塚自体の話はあまり多くなかつた。また、そのほとんどは既知のことで、正直に言えば、新鮮味がなかつた。他の三人はと横を見ると、早起きと昼食のビールが効いて夢の中ようである。

ただ、黒塚古墳の木棺はクワ（桑）で作られており、唯一の発掘例であること（大半はコウヤマキ「高野槨」製）、被葬者が養蚕に關係した女性である可能性が高いこと（クワ↓養蚕↓絹糸↓機織り↓女性との推定）、しかし、中国の神仙思想（扶桑の木）に結びつけるのは危険である、と話されたのは印象に残つた。

この大筋は、すでに六月二三日、大和古墳群調査委員会が公表している。しかし、河上先生は翌日の各紙で「被葬者は養蚕に關つた人物」とコメントしておられるが「女性」だとはいつておられない。おそらく副葬品に刀剣・武器類が含まれていたので女性だと明言できなかったのだと思う。講演会では思はず本音がでてしまったというところだらう。

これについて、辰巳和弘先生のコメントも産経新聞と山陽新聞に出ていた。辰巳先生は、ヤマグワ(山桑)はコウヤマキの代用材で、被葬者は男性であろう、と推定されている。これは河上先生に対する見方として取り上げられたものだろう。

確かに、辰巳先生のおっしゃる通り、甲冑や馬具が納められているから被葬者は軍団の長である、というように、古墳の施設や副葬品のすべてを安直に生前の社会的地位に結びつけるべきではない。しかし、古墳の祭祀や喪式に、現世に関わる事物がまったく取り入れられていないのかといえば、そんなことはない。例えば、古墳時代に製塩が盛んに行なわれた沙弥島の白石古墳には設楽式土器が副葬されており、これなどは明らかに生前の職能を表している。

このクワの問題についていえば、河上先生の見解の方が妥当だと思う。黒塚ほどの古墳を築く人物が、何らかの事情でコウヤマキが手に入らなかったからヤマグワで代用した、とはとても思えないからである。

新聞によれば、調査委員会は「木棺は直径約一畧、長さ六・三畧のクワ属の巨木を使い、表面に水銀朱を塗っていた」と発表したという。

僕は奈良県の吉野出身なのでよく

わかるが、コウヤマキはスギやヒノキと同様、珍しい樹木ではなく、簡単に手に入る。直径一畧以上のコウヤマキも多くある。だが、直径が一畧もあるクワの木というのは見たことがない。率直にいうと、コウヤマキより巨大なクワの方がはるかに手に入れにくかったのではないだろうか。だが、現代と古墳時代とは樹木の植生が違うかもしれない。

そこで専門家に聞いてみることにした。茨城県に農林水産省森林総合研究所がある。ここの木材利用業務室長の能城さんは、古墳時代の木棺や木製品の材質の鑑定をしておられる方である。その能城さんのお話をまとめると次のようになる。

①ヤマグワ自体は縄文時代から山野に数多く自生しており、それほど珍しい植物ではない。古墳からもヤマグワを素材として使った木製品が多く出ている。ただ、木棺に使われたものは今まで発見されていなかった。それには理由があるように思う。

②野生種にせよ栽培種にせよ、クワが直径一畧にまで成長することは極めて稀で、ふつうは大きくても六〇センチくらいまでである。また、長さ六・三畧の木棺を一本のクワで作るとなると、よほど巨大なものでないと難しい。そうしたクワ

は当然、簡単には手に入らない。

③もし、この木棺を直径六〇センチくらいまでの一般的なクワで作ったとするなら、一本ではとうてい無理で、数個を継ぎ合わせて作ったということも想定する必要がある。

④コウヤマキは奈良県ということならば、古代でもありふれた樹木である。例えば、平城宮の柱の三分の二はヒノキで、三分の一はコウヤマキだ。直径一畧というのもコウヤマキならごく普通で、探すのに苦労はなかったはずだ。

要するに能城さんは、通常のクワは割竹型木棺の素材には向いていない、ということをおっしゃったのだと思う。とにかくお話を聞く限り、割竹型木棺をクワで作るには、めったにない巨木を手に入れなければならない。あるいはわざわざ寄せ木で組み合わせたりする必要がある。どう考えても、コウヤマキを一本で割り貫いたほうが手っ取り早かったはずである。

こうしてみると、コウヤマキが手に入らないので、たまたまあった巨大なクワを代用したのではなく、探し出す苦労を承知の上で、あえてクワを選択したと考えるほうがよさそうである。辰巳先生が、古代人の絵

に意味のない絵はない、とおっしゃるのと同じように、この場合、クワを棺材にしたのも何らかの意図・意味があったと考えるべきだろう。

この意味を中国の神仙思想に結びつける研究者もいる。山口大学の近藤喬一先生がそうで、読売新聞には「中国との交流で、扶桑を尊ぶ思想が伝わっているとすれば、三角縁神獣鏡の製作地や性格を考える重要な資料になるのではないか」とのコメントが載っている。河上先生はこれを行き過ぎだといわれたのである。

ひるがえって、黒塚古墳には葺石がまったくない。これも大和古墳群の前方後円墳としては異例である。また、大量の三角縁神獣鏡(一枚ずつ絹織物に包まれていたことが確實)や、いままで出土例のないU字形鉄製品(これも絹繊維の痕跡が残っていた)を副葬していたのも、いまのところ特異である。

このように黒塚古墳には他の前方後円墳とは違う点が多々あり、やや異色な被葬者を想定してもよいのではない。それが養蚕と機織りに関係する女性(例えば后妃)だとするのは、たとえ石槨内に刀剣・武器類の副葬があったとしても、これらを邪霊を払う呪物とみれば、さほど不自然なことではないと僕は思う。

秋の古墳めぐり

津山盆地の古墳を探訪する

— 陶棺に秘められた謎に迫る —

九月のバス例会は、四年ぶりに津山を探訪します。以前は、今は亡き立石定夫先生のご案内による例会でしたが、今回は古墳部会担当の秋の古墳めぐりで、四年前とは見学の視点が大きく違います。

古墳探訪を中心に、古代史に関する史跡を主として探訪地を設定しました。とくに横穴式石室に納められる陶棺は美作の古代史を考える上で重要です。陶棺は美作を中心とした岡山県と畿内しかほとんど出土せず、しかも岡山県が全国の七割以上を占めるのです。この陶棺に秘められた謎にあなたも挑戦してみませんか。

《主な探訪予定地》

★美和山古墳群(国史跡、津山市三宮)

胴塚(美和山一号墳)は美作地方最大の前方後円墳で、全長は九二m。五世紀の築造で、中世に山城(美和山城)として利用され、その土塁が残っている。他に蛇塚(円墳)、耳塚(円墳)などがあり、史跡公園として整備されている。

★沼弥生住居跡群(津山市沼)

登呂遺跡に次いで日本で二番目に発掘調査された弥生時代の住居遺

跡として有名。当時の住居が復元整備され、公園化されている。

★津山弥生の里文化財センター(同)

沼弥生公園に隣接して市立埋蔵文化財センターがある。弥生時代を中心として、古代史の展示が充実している。

★津山市郷土博物館(津山市山下)

津山盆地の古墳の特色は何といっても、陶棺が圧倒的に多く用いられていることで、その陶棺を多数展示。これを見ずして津山に来た意味はない。

★日上天王山古墳(津山市日上)

県内でも最古に属する、全長五五mの前方後円墳。近年、岡山大学の手によって発掘調査された。

★日上畝山古墳群(同)

天王山古墳よりは新しいが、全国的にも数が少ない前期の群集墳。天王山古墳北西側の丘陵上に五六基の円墳が密集して造られている。

★佐良山古墳群(津山市皿)

後期の群集墳、ほとんどが横穴式石室。中宮一号墳は、岡大の近藤義郎名誉教授によつて発掘調査され、群集墳研究の嚆矢となった。

剣戸口古墳は別名、比丘尼塚とも呼ばれる。日蓮宗不受不施派の尼さんたちが岡山藩の弾圧に抗議してこの古墳の石室にこもり、断食

死したためだ。

※天候・時間等の都合により変更・追加・省略する場合があります。

【実施要項】

《日程・集合時刻》

九月二〇日(日)

午前七時三〇分(雨天決行)

《集合場所》

福山駅北口バス乗降場

(福山キャッスルホテル前)

《参加費用》

会員 五五〇〇円

一般 五八〇〇円

※今回は遠方なので、バス代と高速代が多かることと入館料が二回必要なのでこういう金額になってしまいました。ご了承ください。

《募集人員》先着順厳守で四三名

※五三名までは補助席でかまわなければ受け付けます。それより後はキャンセル待ちになります。

《申込方法》

事務局に電話でお申し込み下さい。

《受付開始日・時間》

八月一八日(火)午前八時(厳守)三カ月ぶりの例会のため大人気が予想されます。参加ご希望の方はお早めにお申し込みください。

《その他》

弁当と飲物は持参のこと。歩きやすい服装・靴で参加ください。

古墳講座V

本郷町の巨石墳を探訪する

九月の古墳講座Vは、豊田郡本郷町の古墳を探訪します。

広島県最大の横穴式石室をもつ梅木平古墳、特異な複室構造をもち、花崗石製の石棺二個を納める御年代古墳、同じく巨石墳の貞丸一号墳(あの竜山石製石棺)・二号墳、南方神社境内石棺等を見学します。

今回の見学会は大人気が予想されるため、すぐにお申し込みください。

【実施要項】

《日程》九月五日(土)

《集合時刻》午後一時三〇分

《集合場所》福山駅北口

「福山キャッスルホテル前」

《募集数》限定一二名

《参加費》実費(一二〇〇円程度)

★会員のクルマに分乗。クルマを出してくださった会員は無料。ガソリン代・高速代を分乗した他の3人で分担。資料代を含みます。

《その他》弁当・飲物各自持参。歩きやすい服と靴でご参加ください。

《受付》山口古墳部会長宅まで。

(☎〇八四九一四五一六一七三)

《受付期間》

八月二四日(月)～二六日(水)

午後八時～九時(時間厳守)

一泊旅行参加者募集

燃える秋、但馬・丹後を味わう旅

―竹田城と古代丹後王国を歩く―
恒例の一泊旅行のコースや費用が決定しましたのでお知らせします。

【実施要項】

【日程・集合時刻】

一〇月一七日(土)～一八日(日)
午前六時四五分(雨天決行)

(朝食をすませてご参加ください)

【集合場所】福山駅北口バス乗降場

(福山キャッスルホテル前)

【参加費用】

会員 二万九千円・一般 三万円

【募集人員】四十五名限定

原則として補助席は使いません。

【申込方法】

事務局に電話でお申し込み下さい。

これが仮り申し込みになります。

その後、振込用紙をお送りします

ので申込金として一万円を払い込んで下さい(残金は当日)。

これが本申し込みになります。

【キャンセル】申込金について、九

月末日までは全額返金、一週間前ま

で半額返金、以後は返金なし。

【受付開始日・時刻】

八月一日(火)午前八時(厳守)～

大人気が予想されます。絶対に参

加したい方はすぐにお申し込みを。

【主な探訪予定地】

竹田城(和田山町)

すでに遠方から瞭然としていた。

新緑のあふれる分厚い山なみの頂部

には、白く輝く巨大な岩塊が剥き出

しとなっていた。登山道を登り、大

手門跡を抜けると、そこには信じら

れない光景が広がっていた。

我々の会であつてこれほど凄まじ

い山城を探訪したことがあつただろ

うか。見るものが感動せずにはいら

れない、文句なしの初日のメイン。

※登山時間は約三五分。足腰に自信

のない方も登る方法があるので事務

局に相談のこと。

和田山町立郷土歴史館(和田山町)

筒江長尾古墳出土の金銅製頭椎太

刀、城の山古墳出土の三角縁神獣鏡

三面(ほかに銅鏡三面出土)などの

国重文のほか、竹田城のジオラマ等

も展示。考古資料が充実している。

大藪古墳群(養父町)

式内古社養父神社の東方、円山川

をはさんで兵庫県下最大の後期群集

墳の大藪古墳群がある。竹林にある

コウモリ塚古墳は古墳群中最大規模

の横穴式石室をもつ方墳である。

城下町出石(出石町)

室町時代、出石は山陰・山陽に十

一カ国を領した山名氏一族の時義の

居城(此隅山城)があつたところ。

出石川に沿った静かな山間に、但馬

の小京都と呼ばれる出石の町並はあ

る。辰鼓櫓や家老屋敷などが残り、

城下町の面影をよく残している。自

由散策時間をたっぷりとする予定。

出石神社(出石町)

杜の中に静かに佇む但馬国一宮。

祭神は但馬国を拓いたと伝えられる

新羅の王子、天日槍神と伊豆志八前

大神。天日槍神伝説はいまも但馬国

に濃密に分布し、開発の神として厚

い信仰を集めている。

神谷太刀宮(久美浜町)

垂仁天皇の時代の四道將軍一人、

丹波道主命によって創建されたとい

え、道主命が太刀宮に納めたという

国見剣が神霊として祀られている。

境内には、兵庫県最古の明治の木

造建築、旧久美浜県庁御玄関棟が移

築されている。

湯舟坂二号墳(久美浜町)

巨大な横穴式石室をもつが、天井

石は失われている。十七年前の調査

で金環・玉類・武器類・馬具等四五

〇点もの副葬品が出土した。中でも

金銅製双竜環頭太刀は注目を浴びた。

京都府立丹後郷土資料館(宮津市)

先土器時代から近代までの考古資

料を中心に展示。湯舟坂二号墳の双

竜環頭太刀や大田南五号墳(弥栄

町)出土の青龍三年銘鏡などもある。

籠神社(宮津市)

丹後国一宮。元伊勢といわれると

おり主祭神は天照大御神と豊受大御

神。また、海部氏の祖神天火明神も

祀る。日本最古の系図、海部氏系図

(国宝)があることでも有名。

知恩寺(宮津市)

日本三文殊の一つ。平城天皇が霊

夢をみて勅願により建立されたとい

う。古くから天の橋立に遊ぶ人はま

ずこの寺に参詣したもの。国重文の

多宝塔、明和期に建造された見事な

楼門などの建築物ほか、仏像も木造

文殊菩薩など三体の国重文がある。

加悦町古墳公園(加悦町)

全長一四五mの前方後円墳、蛭子

山古墳をはじめとして、円筒埴輪列

や葺石が復元された作山一号墳など、

古代の丹後半島の勢力を偲ばせる古

墳が集中して築かれている。また、

園内には「はにわ資料館」もある。

※宿泊所は円山川河口近くにあつ

てロケーションは最高。施設・食事

とも充実している。

「かんぼの宿 但馬海岸豊岡」

☎六六九一六一二三

豊岡市小島字荷柄一一八八―八

☎〇七九六―二八―三三七五

※探訪コースはあくまでも予定です。

天候・時間などの都合で変更・省略

する場合があります。

第九回郷土史講座

家庭での神祭りについて

— 祭としての年中行事 —

柳田国男は「祭のはなし」の中で「祭という漢字は、中国では家の先祖にあたる人に奉仕するおまつりという意味しかもっていなかったのがあります。人の靈魂をまつることだけが、漢字の祭の意味ですから、日本でも、まつりということばのはじめの用途は、子孫が先祖を祭る場合に限られていたろうと思います」と述べています。つまり柳田によれば、日本の神・祖霊という事なのです。

もともとは祖霊を祭っていた祭りが、その真の意味がほとんど忘れられながら、今でも盛んに行なわれています。それが、例えば雛祭りであり、端午の節句（女の家忌みごもり）であり、七夕なのです。

今回の講座では、賀茂神社宮司の石井良枝さんに、こうした家庭内で行なわれる神祭りの儀礼やその歴史、意義等についてお話しいただきます。

【実施要項】

〔日時〕 九月二十六日（土）午後二時

〔会場〕 中央公民館会議室

〔講師〕 石井良枝さん

（賀茂神社宮司）

〔資料代〕 一〇〇円程度

『冷泉家至宝展』開催

— 前売券を当会で販売中 —

この九月一日（金）～一〇月一日（日）の一月間、広島県立歴史博物館で特別展「冷泉家の至宝展」が開催されます。

これについて県博から備陽史探訪の会に前売券の販売依頼がありました。一枚八〇〇円（当日券一〇〇〇円）ですが、三〇〇枚という膨大な数を預かりました。会員の皆様に一枚ずつ買っていただいてもまだ消化しきれない数ですが、県博にはいつもお世話になっているので、会として少なくとも二〇〇枚は販売しないと顔向けができません。

これから会の諸行事で販売していきますので、できれば一、二枚の購入のご協力をお願いいたします。会の行事に参加できないが、購入はしたい、という方はお電話いただければご相談に応じます。

また、個人的に何枚かお預かりいただき、知人・友人に販売して下さる方も募集しております。

この前売券販売についてのお問い合わせは、事務局の平田（☎〇八四九一三三―三七八一）までお願いいたします。

今後の定期講座

【古事記】を読む

日時 九月二日（土）午後二時

場所 中央公民館会議室

座長 神谷和孝さん

平田恵彦さん

資料代 一〇〇円程度

【備後古城記】を読む

日時 九月一九日（土）午後七時

※八月は盆のため休みます。

場所 中央公民館会議室

座長 出内博都さん

資料代 一〇〇円程度

新入会員紹介

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

六月一三日（土）

【古事記】を読む「参加一九名。」

六月二〇日（土）

【備後古城記】を読む「参加一八名。」

六月二七日（土）

第六回郷土史講座「記紀二万葉集」に現れるふるさとの神々」

講師は柿本光明さん。参加三一名。

六月三〇日（火）

役員会出席者一二名。一泊旅行の原案などを検討する。

七月四日（土）

古墳講座Ⅴ「倉敷ライフパーク見学会」参加一二名。

七月十一日（土）

【古事記】を読む「参加一六名。」

七月一八日（土）

終了後、七月度行事案内発送作業。

七月二五日（土）

【備後古城記】を読む「参加一八名。」

第七回郷土史講座「津山周辺の古墳について」。

スライド映写を含めて時間延長の大熱演。

講師は山口哲晶さん。参加三七名。

七月二五日（土）

役員会。今後の会の運営・会則の改正などについて討議する。出席一八名。

※会場はすべて福山市中央公民館。

特別歴史講演会開催

『他界は何処』

古墳文化の本質を探る

盛夏八月、備陽史探訪の会恒例となった特別歴史講演会を開催します。今年お招きした講師は、同志社大学歴史資料館で学芸員をなさっている辰巳和弘先生です。辰巳先生は考古学の専門家ですが、従来の考古学のあり方を痛烈に批判、新たに「古代学」を提唱していらっしゃいます。

特に古代絵画（銅鐸絵画・土器絵画・古墳壁画等）の分野では一頭抜きさん出た存在で、今春、話題を集めたキトラ古墳の壁画の解釈でも斬新な視点を提出され、いま考古学界で最も注目を浴びている研究者といっても過言ではありません（三月七日付読売新聞に白石太一郎氏、和田幸氏とのキトラ古墳についての鼎談が掲載されています。必読！）。

また、学会誌に論文を発表するだけでなく、学術書として古代学三部作「高殿の古代学」「埴輪と絵画の古代学」「地域王権の古代学」（いずれも白水社刊）を出版。一般向けには、今回備陽史探訪の会で販売した「黄泉の国」の考古学」（講談社現代新書）を上梓。ごく最近も月刊

「現代」七月号に「古墳壁画は古代人の「あの世」である」という文章を発表され、精力的な啓蒙活動を続けておられます。

辰巳先生の古代史についての学説は多岐にわたるのですが、今回の講演ではその中から、古墳、なかでも前方後円墳のもつ真の意味、本質についてお話しいただきます。

従来、前方後円墳（形）は単なる○と□の組み合わせにとらえられてきたのですが、果たして本当にそれでよいのか――。

完成した古墳は、白日のもと、墓石に覆われた巨大な墳丘を白く輝かせる。人々は、そこに神の仕業を思い、他界を観想したことであろう。古墳はまさに人工の磐座と認識されたことであろう。

墳頂が「他界の王宮」であり、墳丘全域が常世であるなら、出現以来大王や豪族の墓として、大型古墳のほとんどを占めてきた「前方後円」という奇妙な形にも意味があると見るべきである。

「黄泉の国」の考古学」よりは、その真の意味とは――それは当日聞きに来てください。

失われた古代人の精神世界を、世界観を、他界観を二時間かけてたっぷりお話しいただきます。

《辰巳和弘かく語りき》

「藤ノ木古墳（奈良県斑鳩町）」には華麗な金銅製の馬具が副葬されていたが、研究者はその製作技術や文様の分析と大陸との系譜など、モノやカタチを追いかけるばかりで、これほど装飾豊かな馬具をなぜ古墳に副葬するのかという基本的な点に目を向けないのか不思議でならない。馬具の副葬は五世紀にはじまるが、それこそ死者の靈魂が馬具をつけた飾り馬を御して他界へと導かれるという葬送觀念の現れであることに気づくべきである。月刊『現代』七月号「古墳は墓である。考古学者は古墳とその出土品から、さまざまな古代史像を描き出す。しかし従来の研究はあまりにも政治的・社会的な面に片寄った分析がなされてきたからいがある。古墳の研究はまず古墳のもつ墓としての宗教的・精神的な観点からの分析がなされるべきであろう」

『黄泉の国』の考古学」あとがき

【実施要項】

《主催》 備陽史探訪の会

《共催》 広島県立歴史博物館

《日時》 八月二十二日（土） 午後二時

《会場》 広島県立歴史博物館講堂

《講師》 辰巳和弘先生

（同志社大学歴史資料館学芸員）

《会費》 無料

辰巳先生を囲む会を開催

八月二二日の講演会終了後、講師の辰巳先生を囲んで慰労会を兼ねた懇親会を開催します。講演で感じたこと、疑問に思ったことを先生に直に話したり、尋ねたりできるチャンスです。また、単に冷たいビールが飲みたいという方も大歓迎。参加ご希望の方は事務局までお申し込みください。

《会費》 三〇〇〇円程度

《会場》 「養老の滝」福山店

福山市元町一三―五

《時間》 午後五時～七時

《受付》 八月一日（火）午前八時～

※参加人数が多数になった場合には会場等を変更する場合があります。

編集後記

バス例会はしばらくお休みですが、八月に実施する特別歴史講演会が大きなイベントになります。気鋭の古代学者の辰巳和弘先生のお話がいまから楽しみです。

会場を備陽史探訪の会会員で満員にしたいですネ。よろしく！

（磐座亭主人）

備陽史探訪の会事務局 ☎ 〇六四

福山市多治米町五一―一九一八

☎ 〇八四九（五三）六一五七